

5月28日ペンテコステ礼拝

聖霊を求める

イザヤ書

第32章 15～20節

ルカによる福音書

第11章 5～13節

小海 基

「約束の聖霊」が降って教会が
はじまった

今日は聖霊降臨日、ペンテコステです。ペンテコステというのはギリシャ語で「50日目」という意味の言葉で、イエス・キリストが復活して50日目の、ユダヤ教でいうところの7週の祭り（7×7＝49、イエスキリストの十字架が過越しの祭りで起こったので、そこから49日後がペンテコステとなる）に、「約束の聖霊」が降って教会が始まり、「地の果てに至る」まで弟子たちの伝道が始まっていったことを覚える日です。

いつもならルカが書いた使徒言行録の第2章を読むのですが、今年には敢えて「聖霊」について書かれています別の箇所を読むことにいたしました。ルカが書いた使徒言行録は別名「聖霊行伝」という人もいるくらいで、聖霊の導きを強調しているのは確かなのですが、印象が強烈過ぎて聖書の描く聖霊がこんな感じだと思われて誤解されかねない嫌いがあります。

むしろ「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ……響き渡り……炎のような舌が分かれ分かれに現われ」といったような聖霊の描写は使徒言行録2章だけで、旧約や新約で別の箇所に出てくる聖霊は、もつと静かでおだやかで当たり前のような存在なのです。

ように熱狂的になるというようなイメージとは全然違っていて静かなもので、当たり前前に現われる霊だと知らされます。

バルトによる定義では聖霊は「共同体」に働き給う

今朝も礼拝前の成人科で20世紀のスイスのプロテスタント大神学者バルトの著書を読みましたが、バルトは自分の「教義学」を単に「教義学」としないで「教会教義学」と名付けるほど聖霊によって教会がつくられる働きが一番大切だと記しています。

バルメン宣言の第3項で、「教会とは、イエス・キリストが御言葉とサクラメントにおいて、聖霊によって主として、今日も働きたもう兄弟（姉妹）たちの共同体である」と定義しました。「共同体である」というところが大切に、ここに従来よく使われる「キルビエ」という言葉を使わず、バルトは「ゲマインデ」（共同体）と敢えて定義したのです。

教会とは大聖堂、教会堂、組織

や教派じゃない。イエス・キリストの名のもとに2人または3人が集まる群れが教会だと言うのです。そこに聖霊が吹き込まれることで、キリストの体なる教会が生まれるのだ、と言うのです。

カール・バルトの有名な言い替えですが、ちょうど使徒信条の中でイエス・キリストが「聖霊によりて宿り」と告白されているように、「聖霊の力によって受肉され、ただ聖霊の力によってだけ、教会は存在する」と定義するのです。教会を存在させる働きが聖霊なのです。聖霊が教会を啓示に基礎づけるのです。啓示の受領者は旧約ではイスラエルの民、新約では教会ということになるのです。

啓示の究極の形は、「肉となりたもう御言葉」であるイエス・キリストでしょう。そしてイスラエルの民や教会は、聖霊によって「キリストの体」とされるのです。

ですから、何か個人的、感情的、ヒステリック、忘我的に聖霊を捉えるのではなくて、私たちが「共同体」としてキリストの働きを担うことができるのであれば、「聖霊

の働き」を祈り求めなければならぬ。そういう存在として私たちがごく身近なところに聖霊という存在があるというのです。

そういう意味で、使徒言行録第2章以外の旧約、新約の聖霊に関わる箇所を読み直してみると、確かにそういうものとして語られていることに驚かされます。

イザヤ書第32章15節以下では「ついに、我々の上に霊が高い天から注がれる」と語られます。個人にじゃないのです。「我々」つまり共同体なのです。さらに続いて、「荒れ野は園となり 園は森と見なされる。そのとき、荒れ野に公平が宿り 園に正義が住まう。正義が造り出すものは平和であり 正義が生み出すものはとこしえに安らかな信頼である」。

我々の力や知恵がそういう状態をつくり出すのではなく、「天から」「聖霊」が注がれ、降つてきてそうなるのです。そして荒れ野が「園」、「森」になるのです。

しかし、地上の「園」、地上の「森」は、創造されたはじめの時の「エデンの園」とは違います。「しかし、

森には雹が降る。町は大いに辱められる」。そこに共同体の出番があるのです。

つまり、「種を蒔き」、「牛やろばを自由に放つ」神の民の働きが求められるのです。そうした働きを担う幸いが私たちに与えられるのです。

聖霊の働きを神様に求める

ルカによる福音書11章5節以下は、弟子たちに「主の祈り」の解説を主イエスが語ったあとの部分です。ここで、「聖霊」を「天の父が与えてくださる」と語られていることに本当に驚かされます。「主の祈り」は日常の祈りとして教えられたものですが、私たちが群れとしてこの地上において、「キリストの体」となり、砂漠を「園」や「森」に変え続けていくために、「種蒔き」をし「牛やろばを自由に放つ」日々の中で、何より神様に求めなければならないものとしてあるのが「聖霊」の働きなのだ

と解説されるのです。「日毎の必要なパン、日毎の糧

を与えたまえ」という祈りは、自分一人だけの飢えでなく、「われらの」祈りだということです。

「その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう」(8節)。

そして、本当に私達の共同体、

群れがキリストの体として「存在」するためには、「このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与え、自分の子供には良い物を与え、父は求める者に聖霊を与えてくださる」(13節)のです。

バルトは『教義学要綱』第21講「われは聖霊を信ず」のところで、要旨次のように述べています。

五旬節^{ペンテコステ}での聖霊の降臨において重要なのは、キリストから人間に向かう運動です。イエスは、彼らに息を吹きかけ給います。「聖霊を受けよ！」(ヨハネ福音書20・22)と。キリスト者とは、そのような、キリストによって息を吹きかけられている者たち

のことです。それゆえ、私たちは、ある意味では、十分に醒めているのでなければ、聖霊について語ることができないのです。そこでは、キリストの御言葉と御業^{みわざ}とに対して 人間が参与することが問題なのです。

(312頁)

つまり、聖霊を受けて熱狂するのではなく、むしろ「醒めている」ことが強調されています。

聖霊により受肉され、人間となり給うキリスト、肉となり給う神の言葉が、更に聖霊を受けて、私たち共同体を「キリストの体」として、言葉を伝える御業を進められるのです。

ですから、ペンテコステは「われら」にキリストが「受肉」する時なのです。

私たちがそうした働きがなせるよう、主の祈りを日々祈るように、聖霊を求めて祈りましょう。(出席32名、Zoom10件。文責・編集委員会。市川義和要約)